

早くも師走 2016

守安 收

早くも師走。2016年は展覧会が連続し、関連事業も頻繁に行われて随分とあわただしくもあり、嬉しい寄贈品も加わって館にとって成績の上がった良い1年でした。特別展は仙台市博物館との交換展を除くと宮川香山、原田直次郎、浦上玉堂父子、常設展では目新しい宮忠子、森本美由紀、岡崎信吾、瀬本容子からお馴染の国吉康雄、さらにI氏賞受賞作家展と岡山ゆかりの美術家ばかりが主役を務め、開館30周年を前にして設立目的の核心部分である岡山の美術風土の豊かさを示すことができたようです。次の特別展では来る3月、赤毛のアン、フランダースの犬、ラスカルといった面々が登場するアニメを扱う「世界名作劇場」へと路線変更を行いますが、いつも作家、作品に敬意を払い多面的な紹介を心がけたいと考えています。▼去る12月1日、第3回岡山経済同友会文化スポーツ委員会が催され、最初に私が「岡山の美術館・博物館の現況」を語り、続いて大原あかね大原美術館理事長から「倉敷、大原、大原美術館」のお話しがありました。参加者は美術館界のトップランナーである大原美術館のさまざまな取り組みに驚かれ感動されていたようです。美術館の使命は各館それぞれ異なりますが、「美術を通じて」は同じです。私どもは公立館ならではの特性・美点を活かして使命達成を図ります。ともあれ、美術館のことを気にかけてくださる方々に感謝の師走です。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

交通案内 JR岡山駅東口から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00（入館は16:30まで）
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで（入館は18:30まで）

休館日 月曜日（休日の場合その翌日）／年末年始／展示替え期間中

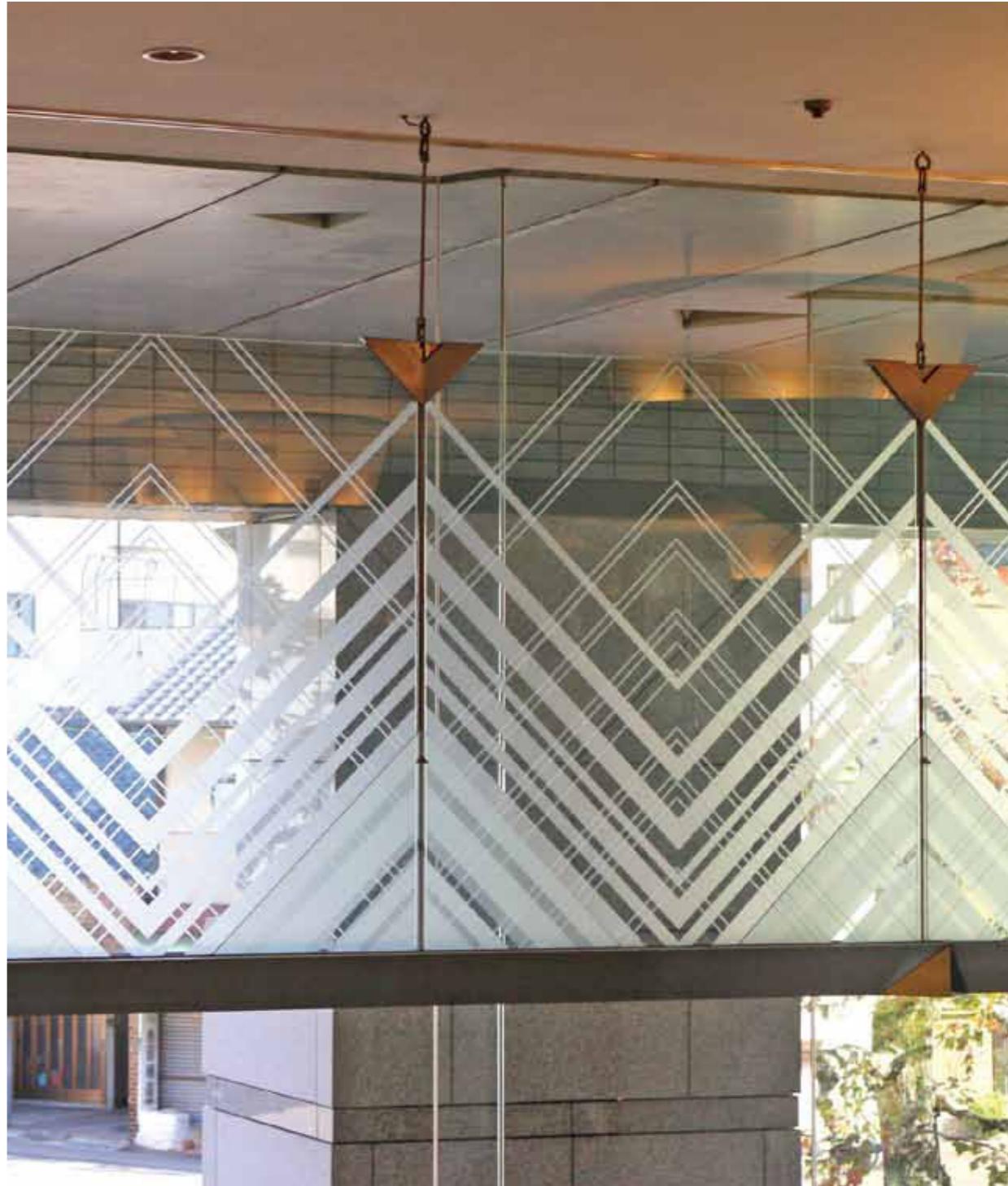
編集後記

大山真季

美術館ニュース115号をお届けします。昨年から続く展覧会シリーズ「岡山の作家☆再発見」も第4弾となりました。本誌の冒頭に掲載している瀬本容子展の記事では金地テンペラ画の制作過程を写真でご紹介していますが、会場ではより詳細な制作の様子を映像上映していますので、ご来館の際はぜひ展示とあわせてご覧下さい。年が明け、2月からは備前焼作家3名による展覧会がはじまります。会期中、カルチャーゾーンの夢二郷土美術館、岡山県立博物館と連携して備前焼スタンプラリーキャンペーンを実施します。3館で備前焼の歴史をめぐることができる内容となっておりますのでこちらもぜひお楽しみ下さい。

「美術館の紹介」vol.15

街路に面したカフェ周辺とエントランス入口の上部に設置されたガラススクリーンには、ジグザグと重なった三角文様がデザインされています。水の流れを表現したこの文様は、当館より西側を流れる旭川や、対岸に位置する後楽園への繋がりを示している。



瀬本容子と金地テンペラ画

橋村 直樹(学芸員)



瀬本容子《祝祭》1997 個人蔵

中世ヨーロッパやルネサンスの雰囲気をどこか感じる、たっぷりした服を着た男女が、煌びやかな金地背景の中で楽器を奏でながら踊っている。高貴で神聖な黄金の輝きに満たされた、優美で幻想的な作品世界を作り出しているのは、倉敷市玉島出身の画家である瀬本容子(1930-)だ。

瀬本の作品には、冒頭で述べたような、ゆったりとした衣装に身を包んで踊ったり、静かに佇んだりしている人物をはじめとして、空中を浮遊する女神や天使、あるいはバラなどの豪華な花々やヒラヒラと舞う蝶、細長い赤い狐といったモチーフが繰り返し登場する。こうした素朴で愛らしくも幻想的なモチーフとともに、彼女の作品を特徴づけているのが、豊かに装飾された燐爛たる金地だ。石膏を塗り重ねた下地の上に金箔を貼ってメノウ棒で入念に磨き(図1)、そこに墨打ちなどして装飾を施すことで、金地は作られる。そうやって準備された金地の上に、ラピスラズリやセピアといった天然顔料と卵黄メディウムを混ぜて作るテンペラ絵具で描画する(図2)。テンペラ絵具の鮮やかな明るい色彩と金地の黄金の輝きが、独特なモチーフを彩り照らし、彼女の作品をさらに優雅で夢幻的なものとしている。

金地を背景としてテンペラ技法で絵を描くこの金地

テンペラ画を精力的に作り続けている瀬本であるが、そもそも彼女は、20代の頃、現代フランス抽象画家を代表するアルフレッド・マネシエ(1911-93)の宗教的な雰囲気を持つ詩的空間と色彩に影響を受けた作品を描いていたという。そんな彼女が金地テンペラの道に進むことになったのは、印象派を学ぶため1962年に初めて渡仏した際、ルーブル美術館でフラ・アンジェリコによる金地テンペラ画の小品を見て、その豊かな装飾性と様式美、そしてテンペラという古典的絵画技法に大いに魅了されたからであった。その時以来、パリに居を定めて留学生活を送りながら、何度もイタリア各地を旅して中世キリスト教絵画や初期ルネサンス絵画を見て回り、さらに帰国してからは、チェンニーノ・チェンニーニによる15世紀の『芸術の書』をたよりにしてテンペラ技法を独自に学んだことだ。

瀬本を魅了したこの金地テンペラ画は、とりわけ12世紀から15世紀のイタリアの中世キリスト教絵画に数多く確認されるが、その系譜を辿ると、古代ローマ帝国の後継であるビザンティン帝国において東方キリスト教徒が礼拝時に用いた聖像画(イコン)に至るといえるだろう。というのも、中世ヨーロッパ世界において文化的先進国であったビザンティン帝国の宗教絵画であるイコンは、高貴で荘厳な芸術として西欧世界に

もたらされ、各地の芸術に影響を与えていたからだ。特に11世紀後半まで半島南部がビザンティン支配にあったイタリアでは、後代のヴァザーリが後悔の念をもつてジョット以前の中世絵画を「ギリシア風」(ビザンティン様式の意)と呼んだほど、ビザンティンの影響は大きかった。今もイタリア各地の教会や美術館を巡ると、中世より残る金地テンペラによるビザンティン様式の巨大な祭壇画や私的礼拝用の板絵を見ることができるのはそのためだ。

金地テンペラ画の起源がビザンティンにあると考えられるとはいって、中世イタリア絵画におけるその隆盛は目を見張る。かつてシエナ大聖堂の主祭壇を飾った《莊嚴の聖母》は、シエナ派の祖ドゥッティオによる金地テンペラ画の代表作だし、「マニエラ・グレカ」を乗り越えてルネサンスへの先鞭をつけたジョットによる名高い《莊嚴の聖母》やシエナ派を代表するシモーネ・マルティーニの《受胎告知》もまた金地テンペラによるものだ。さらにその後のルネサンス期になっても、フラ・アンジェリコやマザッティオ、あるいはボッティチエリなどが金地テンペラによる壯麗な作品を数多く残している。このように金地テンペラは、油彩技法が北方のブランドで15世紀に確立されてイタリアへと伝わるまで、キリスト教絵画の中で主要な役割を担い続けていた。

さらに金地テンペラ画は、実は日本美術にも大きな影響を及ぼしていた。それは御用絵師狩野派による総金地背景の金碧画の発生と発展に関係する。金碧画は、狩野派四代永徳(1543-90)の時代になって突如として隆盛を誇るようになったが、なぜ16世紀半ばになつてにわかに登場したのか、日本絵画史において長

く謎であった。しかし近年、金碧画の技法は、ヨーロッパよりもたらされたキリスト教金地テンペラ画をルーツとするものであることが、技法的分析と社会背景的考察を踏まえて明らかにされた*。当時の日本は、まさにキリスト教が布教されつつあった時代であり、キリストや聖母マリアを描いた金地テンペラ画もまた宣教師たちによって持ち込まれ、信長や秀吉といった時の権力者の南蛮趣味や豪華絢爛な嗜好を背景として御用絵師たちにも広まったとされる。つまり総金地背景の金碧画は、持ち運び可能なキリスト教金地テンペラ画をルーツとし、キリスト教という文脈から離れることで表現内容の幅が広がって絢爛豪華な大画面の障壁画へと展開し、日本固有の絵画として定着していったのだ。

ビザンティン世界のイコンや中世イタリアのキリスト教絵画の中で隆盛し、日本美術の金碧画にも影響を及ぼした金地テンペラ画。熟練した職人的技術を必要とするこの古典的絵画を、瀬本容子は半世紀以上にわたってコツコツと続けてきた。天然顔料や純度の高い金箔を用い、額も自作するなど本物にこだわる誠実な彼女の手から作り出される作品は、祈りとともにあるイコンや中世キリスト教絵画と同質の真摯な精神性を湛えながら、天上の光である金の輝きと優美な装飾性に溢れ、可憐で神秘的なモチーフが色鮮やかなテンペラ絵具によって彩られている。

* 佐々木丞平・佐々木正子「金碧画技法のルーツを追って—キリスト教絵画からの影響」『MUSEUM: 東京国立博物館研究誌』No. 613 (2008), pp. 3-5, 7-24.



図1. 石膏下地に貼った金箔をメノウ棒で磨き上げる。



図2. 卵黄と酢からなるメディウムと天然顔料を混ぜ合わせた絵具で描画する。
※両図とも「瀬本容子 金地テンペラ画を見る中世の輝き」『美術の窓』No. 285 (2007), pp. 26-28より転載。

備前焼、好きですか？

福富 幸(主任学芸員)

岡山に住んでいると備前焼はなんとなく当たり前にあるもので、子どもたちは4年生になると地域の伝統工芸として学びますし、お友達のお父さんは備前焼作家、ということも聞きます。美術館や博物館に来館される方は、備前焼を持つてし使ってるし、という方が多いでしょう。しかし、お父さんもお母さんもお酒を飲まないから德利知らない、急須使ったことがない、備前焼?えっ何ですか?、ということも少なからずあります。説明をしてもいまいちピンとこない反応に、桃山備前も金重陶陽も過去の栄光か、と思うことがあります。私たちの生活はどんどんと多様化し、選択肢も多く、その中で備前焼が占める割合は大きくなっています。無釉焼き締め千年の伝統も私たちには関係のないものになりそうな気配が漂っている。消費者である私たち以上に作り手はその厳しさを感じているのではないでしょうか。

近年、伝統工芸展を見ていると萩、丹波、信楽、常滑、笠間、もはやどこの焼き物かその違いがわからないものが増えました。生き残りをかけて、でしようが、作家の個性の下に窯業地の特性は影を潜めてしまったようにも思えます。それで良いのか。備前はどうする?釉をかけるか、象嵌をほどこすか、形や素材を変えてみるか、クラフトに、インテリアに、建築に、抜け道を探して作家たちはもがいているようです。

島村光(1942-)は、若い頃に前衛美術の洗礼を受け、後に帰郷し細工物を始めましたが、50歳まで作品を発表しました。



島村光《煙》2012 ©秋山嘉邦



金重有邦《伊部耳付壺水指》2005 ©秋山嘉邦



隠崎隆一《花器》2016 ©道 忠之

形にのぞむ静かなおもい 「I氏賞受賞作家展」後記

古川 文子(学芸員)

ことがないような作家でした。抜群の造形力で対象を捉え、これまでの細工物にはないウイットに富んだ作品を創り、現代でのこしとして注目されています。金重有邦(1950-)は、歴史ある“金重”的ブランドとプライドを背負い、使える器、そして父素山ゆずりの茶陶に取り組んでいます。その背後には中国や朝鮮の美術への強い関心と幅広い教養に裏付けられた見識があります。長崎出身の隠崎隆一(1950-)は、大学でデザインを学んだ後、縁あって岡山に落ち着き、作陶を始めました。外からやってきた新しい風は、既存の価値観の抵抗を受けながらも備前焼を大きく刷新しました。友人でありライバルでもある彼らは、得意とするテリトリーは違えども、備前に対して強い愛情を持ち、自身の本分を見つめ制作にあたっています。既に備前を代表する作家としての地位を築いている彼らもまた漠然とした危機感を感じているようでした。その中で何ができるか。

幸いなことに備前では今なお250人とも言われる作家が作陶に従事しています。これほど多くの作家を擁することができる備前の豊かさ、作家たちを惹きつける魅力とはなんでしょうか?10年後、20年後、50年後、この豊かさを持ち続けていられるでしょうか。本展では、備前の中でも個性際立つ三人の協力を得、彼らの作品から各々の陶芸観(人生観)や彼らを育んだ備前の伝統、そして未来を考えてみたいと思います。



隠崎麗奈作品展示風景



北川太郎《时空ピラミッド》シリーズ展示風景



光延由香利《彼女の見た夢》2016



伊勢崎晃一朗《teabawl #1-12》部分 2016

当館では、2010年から岡山県新進美術家育成「I氏賞」の受賞者を紹介する展覧会を開催しています。本年は「おもいを澄ませ形にのぞむ」と題し、第5回・第6回(2011,12年度)に奨励賞を受けた四人の作品をご覧いただきました。ここでは会場の様子を、会期中の催しをまじえてお伝えします。

展示室に入ると先ず、明るい色彩に満ちた隠崎麗奈さんの作品が目にとび込んでいます。FRP(繊維強化プラスチック)や透明樹脂等を用い、「リップスティック」や「コーディネート」など女性的な感覚を活かした自由な造形を圧倒的なスケールで実現しています。愛らしさの中にも凛とした包容力が感じられました。続いてお隣は、がらりと雰囲気が変わって重厚な石の造形—北川太郎さんの「时空ピラミッド」シリーズです。5mm程の厚さにスライスした小さな石の板を一つ一つ接着剤で固定しながら、人の背の高さまで積み上げています。無数の石の積層から生まれる光と影も印象的でした。次の1室に進むと、天井近くから足元まで7mにも及ぶ真っ白いオーガンジーの布に、光延由香利さんの「彼女の見た夢」の世界が広がります。受賞時の油彩とテンペラの技法を用いた絵画から、刺繡や文章による表現へと制作手法が大きく展開しています。純白と静寂に包まれた本作の公開制作も見応えがありました。その奥に並ぶ、伊勢崎晃一朗さんの「teabawl #1-12」は、余分な情報を排し、うつわそのものの質感や表情に注目させる展示構成が新鮮でした。備前市伊部の窯場を訪ねるワークショップも、素材となる土づくりの工程を体験し、感触や性質の違いを実感できたと、参加者に大変好評でした。

このたびは、重森三玲の復元書院で四人の作品が会する空間もお楽しみいただきました。初日のアーティストトークでも話題になりましたが、互いの表現を認め合い、和やかなムードで進んだ準備の様子がここにもよく表れています。ひたむきなおもいで創作を続ける彼らの今後の活動にも是非ご注目ください。



作家4名による重森三玲復元書院での展示

仏教美術の楽しみ方

松島 千穂(学芸員)

この度、「岡山の美術展 第6期」(会期:2016年12月16日-2017年1月29日)において『岡山の仏教美術 涅槃図』を展示します。現代生活の中で仏教美術を見る機会は少ないため、「何が描かれているのか分からず」「どう楽しめば良いのか分からず」というような理由で敬遠される人も多いと思います。今回の展示では県内のお寺と個人が所有する9点の涅槃図を展示し、仏教美術の見方を紹介します。

涅槃図とは、釈迦が亡くなる(入滅する)場面を描いた仏画です。お寺では釈迦の命日である2月15日に涅槃図を掲げて涅槃会という法会を行います。涅槃図の遺例は仏教の宗派を問わず全国に数多くあります。これらの涅槃図を比較して面白いのは、同じ場面を描いている筈なのに、様々な構図や表現があることです。どの作品も中央に横たわる姿で描かれているのが主人公の釈迦ですが、それぞれの涅槃図に様々な顔の釈迦がいます。その表現の違いの理由は、制作された時代の違いや手本にした作品の違い、制作した人の思想や資金力の違いなど作品の制作背景にあるといえます。

よけいじ
餘慶寺に所蔵される涅槃図を例にみると、展示している他の涅槃図と比較しても、絵が描かれている絹の目が粗いことが分かります。また、釈迦や菩薩・仏弟子達は素朴ともいえる表現で、このような描き方は京都など中央で活躍している仏画専門の絵師ではなく、地方の人の制作である可能性が考えられます。この涅槃図の旧表具の書付によると、文明15(1483)年備後山名氏の軍勢の乱入によって寺仏が散失したため、僧達が貴賤貧富に応じて喜捨することを勧進し、その結果316人の発願で越州の全周という絵師が制作して長享2(1488)年に奉納したとあります。上質な画綱が手に入らないような混乱の時代にも関わらず、檀家の方々の信仰の篤さを感じることができます。

このように作品自体と古記録、当時の社会情勢などを包括的に考えることで、歴史の一端を解き明かすことができるという点も仏教美術の面白いところではないでしょうか。会場には涅槃図の見方とそれぞれの涅槃図の特徴、所蔵先のお寺の概要を解説したパンフレットをご用意しています。また、1月9日(月・祝)14時からはフロアレクチャーを開催予定です。この機会に仏教美術に親しんで頂ければ幸いです。



《仏涅槃図》長享2(1488)年頃 餘慶寺蔵



《仏涅槃図》部分

展覧会スケジュール

12月
December

展覧会期間中、当館学芸員による
ギャラリートークや美術館講座など
随時開催予定。詳しくは当館HPまで。
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

1月
January

12月16日|金|—1月29日|日|
【岡山の美術展】瀬本容子展
美しき金地テンペラ画の世界

1月7日|土|14:00～15:00

記念講演会

「瀬本容子のテンペラ 日常に根ざす営み」
講師 有木宏二(美術史家)
会場 地下一階講義室(先着70名)

1月21日|土|14:00～15:00

美術館講座

「瀬本容子を魅了した中世キリスト教絵画の世界」
講師 橋村直樹(学芸員)
会場 地下一階講義室(先着70名)

2月5日|日|13:30～16:00

鼎談

島村光×金重有邦×隠崎隆一
進行 江見肇(山陽新聞社編集局次長)
会場 2階ホール(先着210名)

2月26日|日|13:30～15:30

トーク

アーティストトークと実演
講師 隠崎隆一(陶芸家)
会場 2階展示室、地下1階屋内広場

2月
February

2月1日|水|—3月12日|日|
【岡山の美術展】
島村光・金重有邦・隠崎隆一展

3月
March

3月17日|金|—5月7日|日|

【特別展】
THE 世界名作劇場展～制作スタジオ・
日本アニメーション 40年のしごと～

「フランダースの犬」や「母をたずねて三千里」などで知られる『世界名作劇場』シリーズを始め、数々の人気作を生み出した「日本アニメーション」創立40年を機に企画された展覧会です。アニメーションの礎を築いた「職人」たちによる、貴重な制作資料や原画に加え、岡山出身の映画監督・高畑勲や宮崎駿が制作した資料や絵コンテなど約300点を展示します。本展では『世界名作劇場』シリーズを中心に、アニメーションの制作過程にスポットをあて、映像や立体物を交えながら日本アニメーション40年の軌跡をご紹介します。